4/3

道標

DŌ HYŌ

教科書の歴史

立場で変わる「本物」

村川　庸子

敬愛大国際学部教授

インディアンは野蛮なのか―。

今治から上京し、私が入学した大学の最初の講義は先生のこんな話で始まりました。「まさか、あなたたちの中に、（米国の）インディアンを野蛮だなんて思っている人はいませんよね」。思わず周囲を見渡しました。今、告白すると、私は野蛮だと思っていました。

当時は毎日のようにテレビで西部劇を見ていました。「隊長アダムスの指揮の下、時には憎みまた愛し合う」。「幌馬車隊」の主題歌は今でも歌えるくらいです。白人ガンマンや幌馬車隊の一行を悩ますのが、毛皮を身にまとい、羽根の頭飾りをかぶった浅黒い肌の人々でした。白人を一方的に攻撃しているように見えたインディアンが、実は、後から来たヨーロッパ人に土地や財産ばかりでなく、言語や宗教、命までも奪われていたなどと考えたこともありませんでした。

私がこの講義を聞いた40年前、それはまだ新しい見方でした。当時の世界史の教科書は全て西欧中心に描かれていて、私たちもその見方をそのまま踏襲していたのです。

米ニューメキシコ州は人口に占めるインディアンの割合がとても高い州です。10年前、学生を連れて世界遺産のタオス・プエブロ（古代集落）やインディアンの若者の教育活動、言語保存を支援するボランティア団体を訪ねました。インディアン側でも子どもたちへの言語や伝統的なダンスの継承、かつて彼らとともに絶滅の危機に追い込まれたバッファローの飼育など独自の文化の復元が進められていました。

日本にもアイヌ民族や琉球の人々など、インディアンと同じ立場に追いやられた人がいることは意識していました。ところが数年前、秋田県の払田柵跡を訪れたとき、案内所のビデオを見て驚きました。払田柵は平安時代の蝦夷攻略の拠点とされ、律令国家により関東などから東北に送りこまれた「移民」と「蝦夷」の関係は、アメリカに入植した西欧人とインディアンの関係そのものでした。坂上田村麻呂が「征伐」しようとしたアテルイも地元民に慕われる指導者であったといいます。

差別をなくすためにそれまで使われていた言葉や歴史、物語を書き換えるポリティカリーコレクト（PC）運動が米国から日本に広がったことがあります。本のタイトルも忘れてしまいましたが、見かけは怖いが本当は優しい鬼の村を暴れ者の桃太郎が襲撃する話がありました。困った鬼は宝物を差し出して引き取ってもらう、桃太郎はこれを得意げに吹聴する。それでも実態を知らない人間の社会では、桃太郎が鬼を「征伐」したというおとぎ話を伝えるかもしれません。

高校時代まで教科書の歴史だけが本当で、ひたすら暗記する科目だと思っていました。しかも、あろうことか日本人である自分が西欧人の立場から学んでいたのです。しかし、西欧人とインディアン、立場の違いで世界がこれほど違って見えるのなら、「本物の歴史」は面白いのかもしれないと思い、一挙に視野が広がりました。学生時代のささやかな経験です。

（むらかわ・ようこ、今治市出身）

ふるさと伝言